

『西国三拾三所由来』について

— 解説並びに翻刻 —

稲垣 泰 一

【解説】

一

架蔵の『西国三拾三所由来』（元治元年（一八六四）写本）一冊について、簡単な解説とともに、翻刻を付して紹介することとする。この『西国三拾三所由来』は、すでに本誌、「言語と文化」第二十六号（文教大学大学院言語文化研究科付属言語文化研究所、二〇一四年三月十五日刊）の拙稿「『西国順礼大縁記』について」の解説の注（7）で触れたものである。

まず、書誌を記しておく。

江戸末期、元治元年（一八六四）四月の写本

一冊。料紙は楮紙。縦二十四・三糎、横十六・七糎。表紙・裏表紙とも本文共紙。袋綴。仮綴。全四十一丁（表紙・裏表紙を含む）。墨付本文三十九丁。本文は毎半葉六行。端正な筆跡の漢字、平仮名交り文（一部片仮名もある）。漢字には大半平仮名のルビが付されている。外題は表紙（一丁オ）中央に打ち付け書きで、「西國三拾三所由来」と大書する。

なお、裏表紙（四十一丁オ）の奥書に「元治元年甲子歳／四月吉祥日寫「中原氏／所持」とあるので、元治元年（一八六四）四月の写本で、当初の所持者は「中原氏」を名乗る人物であった。また、裏表紙（四十一丁ウ）には「京衣棚夷川上ル町／井筒屋吉

右衛門／所藏」と記されており、井筒屋吉右衛門なる者の所蔵するところとなったことが分かる。

ところで、西国三十三所観音霊場の成立、及び起源伝承について記す文献資料、書物などについては、前稿で一通り述べておいたので、ここでは省略に従う。近世後期に入って、西国三十三所観音霊場記、または西国三十三所観音霊場記図会など霊場記類の冒頭に、西国三十三所の起源、由来が簡略に記されるようになるが、その部分を独立させて、あらためて一冊本としてまとめあげられたのが、前稿で取り上げた『西国順礼大縁記』であり、また本書なのである。一冊本としてまとめられたものはあまり知られておらず、前稿でも示した通り、数点が翻刻、紹介されているにすぎない。

二

次に、本書の梗概を要約して以下に記す。

① そもそも、西国三十三所観音を廻ることを順礼という。この順礼の根元は、紀州熊野権現

が旅僧と現じて、人王六十五代花山院と同行して、西国三十三所を順礼して廻ったのが始まりである。

② その昔、焰魔大王が冥土で金泥の御経一万部の供養の導師として、書写山の開山性空上人を招いた。その時、大和国長谷寺の開山徳道上人も共に供養を行った。

③ 焰魔大王はその布施として、いろいろの宝物を授けようとしたところ、上人方々は七珍万宝の品々は無益であり、末世の衆生を救済することが望みであると申し上げる。すると、焰魔大王は、日本には生身の観世音の霊仏が三十三鉢あり、それを一度参詣する者は、十悪五逆の罪・咎を作った者でも地獄に落ちず、一家一門、現在の親類、七世の父母までも成仏することを述べ、これを信ずるならば、順礼日記を与えると告げる。上人方々は衆生救済のため、日記文を賜りたい旨申し上げると、焰魔大王は起證（請力）文と名石（跡力）の

札とを授ける。

④

その文には、日本に生身の観世音が三十三鉢あること、西国順礼を一度した者は十悪五逆の罪を作った者でも地獄に落ちず、極楽往生できること、これに相違した場合は、焰魔大王が自ら地獄に落すべきこと、毎月観世音に参詣すべきこと、また、西国札所の箇所書き等が記されていた。

⑤

上人方々はこの起證文と名石の札とを受け取り、わが朝に持ち帰って奏聞したが、その折は西国順礼を弘める時機ではないとして、摂津国中山寺の太子御影堂にこれを納め置いた。

⑥

その後、花山院は十七歳で即位し、十九歳で西国順礼を思い立つ。その師匠を誰にすべきか公卿・大臣に尋ね、勅使を熊野権現に遣わすことになる。勅使が熊野権現に祈念したところ、帰京の道中で仏眼上人という尊い僧と出会うであろうとの夢告を受ける。勅使は帰途、仏眼上人と出合い、内裏に同道する。花

山院は仏眼上人を戒師として落飾。法名を入覚と名乗った。

⑦

花山法王はその布施として、仏眼上人に七珍万宝を授けようとしたところ、上人は衆生救済が望みであると申し上げる。そして、仏果を得ようとするならば、西国三十三所順礼をすべきであると勧める。すなわち、日本には生身の観世音の霊仏が三十三鉢あり、これを順礼すれば地獄に落ちず、極楽に往生することと、焰魔大王が授けた名石の札、起證文、参詣日、順礼箇所等の記文が、摂津国中山寺の太子の御影堂に納め置かれていることを教える。花山法王は勅使を中山寺に派遣し、中山寺の開山涼忠上人と能判法印、弁空法印の三人が太子堂を開いて、順礼日記、起證文を取り出して勅使に渡した。勅使は仏眼上人と同道して内裏に持参し、法王はこれを御覧になった。その文には、三十三所の国別と箇所数が記されていた。¹⁾

⑧

札所一カ所七日間参籠することとして、花山法王は仏眼上人を先達として、西国順札することになる。その時の同行は、冥士、わが朝の神仏等合わせて十三名⁽²⁾であった。この十三名が同行して、西国順札が開始される。順札の納札は仏眼上人が記し、寛和元年（九八五）三月十五日に都を出立して那智に到着、札打ち始め、一カ所七日ずつ参籠して、翌年六月一日、美濃国谷汲山で札を打ち納めた。

⑨

順札の広徳としては、仏眼上人の申し上げるには、十カ条の功德があるとして、その十カ条を逐一詳しく記す。

⑩

順札した者の家には、天照太神宮、熊野大権現、浄土の観世音が影向すること、谷汲山より富士禅定すべきこと、更に、西国順札した者は、現世の親のみならず、七世の父母までが成仏すること、熊野権現の御誓願によれば、熊野に三十三度参詣するよりも功德があることなどを記す。

⑪

仏眼上人は順札の広徳を法王に語り終えると、熊野に参詣すると申し上げて消え失せる。法王は悲しんで、熊野に参つて仏眼上人に再度会いたい旨を祈念する。

⑫

満願の夜半に、神前の戸が開き、位高い声で、仏眼上人とはわが身、すなわち熊野権現であると告げる。法王は感涙のあまり、那智に千日籠り、その後、西国三十三度廻りを思い立つが、年齢を考慮して、ひとまず都に帰った。

⑬

帰京の後、京都の東南の地を選定して、紀州熊野権現を勧請し、諸堂を建立する。これを今熊野という⁽³⁾。西国順札札所十五番である。

⑭

前文の要旨を記す。花山院法王は熊野権現の再誕ともいふべきである。また、仏眼上人は熊野権現であること。最初の順札には冥士、わが朝の神仏等が同行して成されたこと。この縁記を聞く者は西国三十三所順札を一度したことになること、罪科を減して仏果の縁となること、また、熊野権現が仏眼上人と現じ

て仰せられたことを疑う者は、今の世で災難に会い、来世では地獄に落ちること、これは熊野権現の御託宜なので、決して疑ってはいけないこと、などを記す。

⑮

南無熊野那智山清浄殿大菩薩。

大権現宝前の歌、権現の御詠歌一首を記す。

⑯

その後、人王七十七代後白河法王は世の無常を感じ、讓位された後、伊勢神宮に参詣する。

⑰

その時、一人の僧と出会い、落飾する。法名を付けてもらいたい旨願うと、僧は那智山に参拝せよと告げて消え失せる。これは天照太神が現れたもので、法王はありがたく思し召し、那智山に千日参籠する。満願の時、権現が現れ、法王の志が深いので、髪を剃ったと告げる。法王の歌一首と権現の歌一首を記す。法王は権現に、どのようにして衆生を救済すべきかを尋ねると、権現は西国三十三所順礼が功德廣大無辺であると告げる。それ故、西国順礼のことを万民に伝え、西国順礼の人々

⑱

が大勢出てきたのである。

右の通りのことを疑わず、観音を信心すれば、広徳はいうまでもないので、決して疑ってはいならない。ただし、信心にもいろいろあり、自分に応じて考えるべきであるとする。

⑲

花山院法王の御廟所の事。

花山院法王が西国順礼の後、津の国中山寺と清水寺の間が遠距離で、不便であることを思われて、その間の上田の宿より五十里北、尼寺村を登った山上に一字を建立して、ここに籠られた。ここは女官達が同道できない場所なので、その麓に一字の草庵を建てて、女官達はそこに籠って尼となった。^④それ故、そこを尼寺村というのである。中山寺と清水寺の道筋の真ん中を選んで、花山法王自ら一字を建立なさったのである。

⑳

摂津国有馬郡尼寺村、東光山菩提寺。^⑤

右の所は今に至るまで、花山院法王の御廟所である。また、御陵でもある。この由来を知

る人は少ない。この御廟所を参詣しないことがあつてはならない。西国順礼の元祖は花山院法王なので、なお更、拝参しないわけにはいかないのである。それを知らせるためにここに記す。

以上、大変長くなつてしまつたが、本書の梗概を①～⑳にまとめてみた。次に本書の特色を記すことにする。

三

①は本書の大意で、西国三十三所観音順礼は熊野権現が現じた旅僧（仏眼上人）と花山法王が同行して始まつたことを述べる。②以下⑳までは、おおむね前稿の『西国順礼大縁記』と内容の筋の展開である。ただし、花山院の戒師となる仏眼上人は『西国順礼大縁記』では、勅使が河内国石川郡磯長里、上宮太子の墓所（磯長の墓）に派遣されたとき出会つた、眼より金色の光を放つ僧である。その他の文献、書物でも同様であるのに対して、本書⑥では、

仏眼上人は熊野に遣わされた勅使が、熊野権現の夢告を受けて、京への帰途に出会う尊い僧で、熊野権現が現じた僧であることを前提として、それを強調している。また、⑦では、中山寺の開山涼忠上人と能判法印、弁空法印の三人が登場し、太子堂を開いて、順礼日記等を勅使に渡していること、その記文の三十三所の国別と箇所数を明記している点なども、本書の特色である。⑧では、花山院法王が仏眼上人を先達として、寛和元年（九八五）三月十五日に西国三十三所順礼に出立するが、その時、冥土、わが朝の神仏等十三名が同行したとし、その名を列挙している。これも本書の特色といつてよい。

続いて、⑬では、花山院法王は京の東南の地を選定して紀州熊野権現を勧請して一字を建立、今熊野と称して、西国順礼十五番札所としたこと、⑯では、後白河法王が伊勢神宮参詣の際、天照太神が現れ、那智山に参籠すると、満願の時、熊野権現が現れ、法王の髪を剃つたことを告げる。そして、西国三十三所順礼の功德廣大を万民に伝えるようになって

たとする。⑨では、花山院の御廟所、すなわち東光山菩提寺建立の由来を詳しく述べるとともに、花山院の御廟所、御陵であるこの寺に参詣すべきことを強調している点なども本書の特色として挙げられる。

⑨、⑩で三十三所順礼の功德十カ条を掲げたり、順礼したものの家には神々が影向し、更には、父母への報恩が甚大であるとする点、⑭では、仏眼上人が熊野権現が現じたものであることを説き、この縁記を聞く者は両国順礼を一度したことに同じであるとして、罪科を減して、仏果の縁となるとしている点などは前稿の『西国順礼大縁記』と全く同一の記述内容である。

『西国順礼大縁記』は平仮名主体の本文であり、音読をそのまま表記した形跡が見られるところから、霊場参詣、巡礼のいわゆる〈講〉組織の仲間うちで書き記され、読み上げられたものと考えられる。それに対して、本書は端正な筆跡の漢字、平仮名交じり文であり、また、かなり詳しく記述されているので、〈講〉組織の中で作成され、講読されたり、巡礼の

道中に携行して読まれたものと推察される。

なお、本書はやや小ぶりの『西国順礼御詠歌』一冊と一対のものであり、両者をセットとして入手したものである。そこで、ここに該書の書誌を簡単に記しておく。

江戸末期の写本一冊。料紙は楮紙。縦二十・〇糎、横十三・九糎。表紙・裏表紙共に本文共紙。袋綴。仮綴。全十九丁（表紙・裏表紙を含む）。墨付本文十七丁。本文は每半葉二行。漢字、平仮名文で、札所番順に御詠歌を記す。外題は表紙（一才）中央に打ち付け書きで「西国順禮御詠歌」と墨書する。

本稿では、この書の翻刻は省略した。

〔注〕

- （1）西国三十三所の国別と箇所数については、早く高山寺古文書「観音卅所日記」高山寺資料叢書第四冊『高山寺古文書』第二部（東京大学出版会）所収、及び醍醐寺蔵『枝葉抄』

しておく。

「観音卅三所」(醍醐寺資料叢書、研究篇(勉強出版)所収)などに記されている。

- (2) 花山院法王、円融院法王を始めとして、善光寺如来以下江戸期に信仰を深めた神仏、そして徳道上人、性空上人、最後に、熊野権現が現じた仏眼上人の十三名を記す。

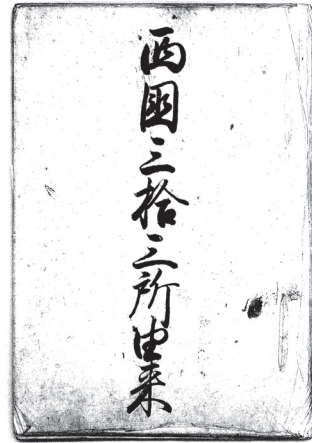
- (3) 現在は京都市東山区の泉涌寺の一院となっている。第十五番札所新那智山観音寺(今熊野観音)をさす。近くには、後白河院が熊野権現を勧請した新熊野神社^{いま}があり、観音寺を本地堂とした。

- (4) 現在、弘徽殿女御の五輪塔を中心に、その他十一人の墓石(十二尼妃の墓)がある。

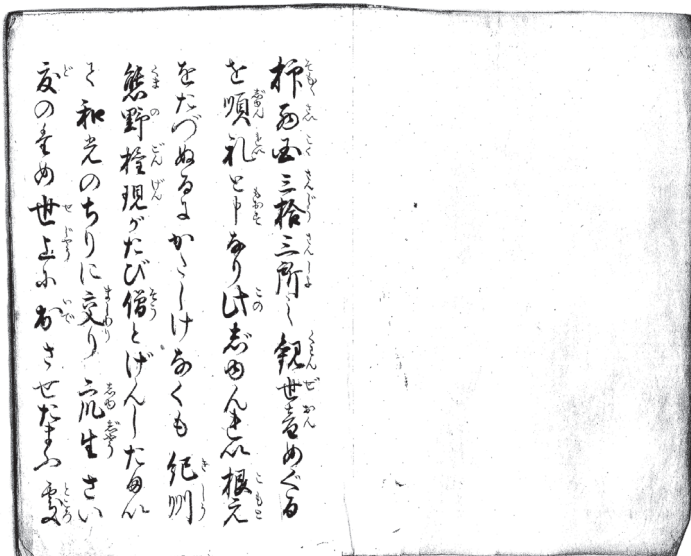
- (5) 兵庫県三田市にある番外札所、東光山花山院菩提寺をさす。境内には、花山院の御陵としての供養塔(宝篋印塔)がある。

〔付記〕 本稿を成すに当たり、言語文化研究所準研究員、名嘉友子氏の助力を得たことを付記

表紙（一才）



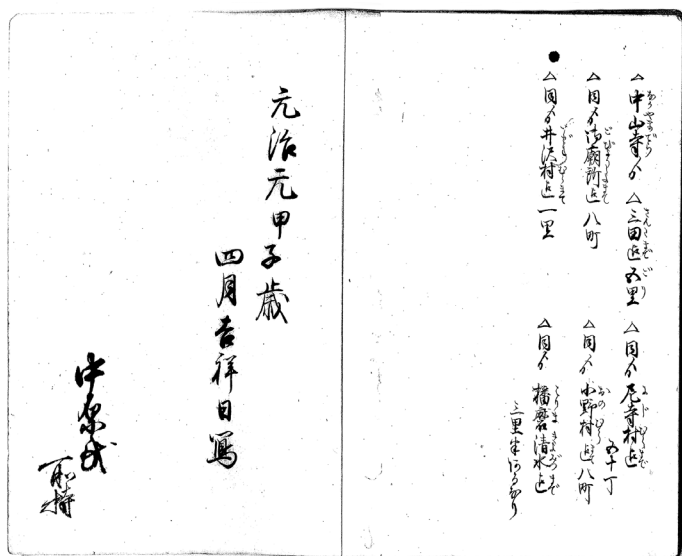
表紙裏（一ウ）



本文冒頭（二才）

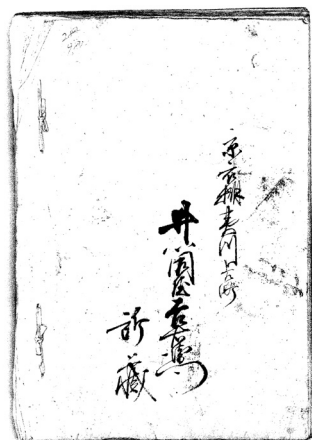
『西国三拾三所由来』について
—解説並びに翻刻—

本文末尾（四十ウ）

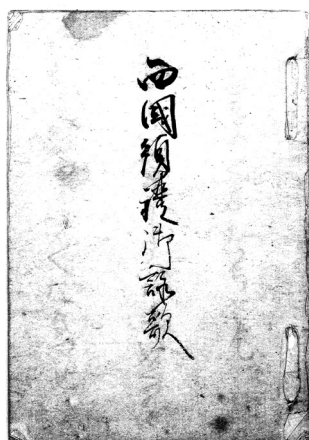


裏表紙（四十一オ）

裏表紙（四十一ウ）



『西国順礼御詠歌』表紙（一オ）



【翻刻】

一、本文及びルビはすべて原文通りとした。字体は通行字体とし、旧漢字、新漢字は区別して用いた。

一、適宜、段落を設け、句読点を施した。

一、会話部分、心中思惟部分は、適宜「」を入れた。

一、丁替わり、表・裏は、丁数、オ・ウの順で、毎半丁末尾に、「(二オ)」、「(二二一ウ)」の如く示した。

一、「ツ」「ニ」「ハ」「ミ」は片仮名とした。

一、異体字、略体字は、「𠂔」は「より」、「二而」は「二て」、「𠂔」「𠂔」は「候」、「𠂔」「𠂔」は「被」、「𠂔」は「魔」、「哥」は「歌」、「𠂔」は「靈」、「𠂔」は「しめて」とした。

西國三拾三所由来 (中央)

「(一オ)

(白)

「(二ウ)

抑、西國三拾三所之觀世音めぐるを順礼と申なり。此じゆんれい根元をたづぬるに、かたしけなくも紀州熊野権現がたび僧とげんしたまいて、和光のちに交り、衆生さい度のため、世上に出させたまふ處」(二オ)、比八人王六拾五代花山院の御宇なり。しかれば、熊野権現様と御同行にて、西國三拾三所じゆんれいめぐりたまふと申なり。去程に、焰魔王宮がめいどにて、こんでいの御經一万部くよう遊し候せつに、一万の衆僧をくよう」(二ウ)し給ふに、御道師には、諸佛諸菩薩御同座のうちに、はりまの国書写山の開山にて、性空上人と申尊き御僧のましますなり。又、此とき二大和の国はつせ寺の開山、徳道上人も御にうめて有。性空上人と供に御供養」(三オ)をのべたもふて、御けちぐわんのせつに、御布施として、いろ／＼の宝もつ数をつくしてさし上給ふところ、其とき上人のかたぐ仰には、「七珍万宝の品々ハ無益なり。願くハ、末世の衆生をたすくべき事こそ望に」(三ウ)候へ共、たからには「一切望無御座候」と御申上げれば、「仰

之義御尤也。かつ又、かたゞ御申には、三界の衆生惡この身にて、地獄へおつる事むざんなり。かれをたすけんとおもへとも、少しの善をもなさず。ゆへに、ごくそつ(四オ)の手に渡候事ひまなし。然るに、大日本ニハ、正じんの觀世音の靈仏と申て、三十三鉢ましますなり。此佛前へ一度参り候ものハ、たとひ十惡五逆の罪咎、むりやうおくごうの間ニ作りなしたるものにて、地獄へハ(四ウ)落べからず。則、佛果の臺に至るなり。かつ又、一家一門之内、壹人成共、西国順礼致す事ならバ、現在之親類ハ申ニ不及、七世の父母迄も、成仏すべき事ハうたがひなし。此義をしかるべきやうにおぼしめせは(五オ)、則、順禮日記を参らせん」と仰ければ、上人かたゞも聞しめし、「それハまことにしゆぜう成御事也。三界の衆生十惡深きにより、まのあたりのふしんをはらし、うたがひ申間敷候。何とぞぐ、末世の衆生をすくひ(五ウ)申度ゆへ、何そかたき御書ニても送りましたまわりや」と仰けれハ、ゑんま十五ハ、實にもとおほし召て、起證文

なされけるが、其時に、名石の札を拵て、其文ニ曰、一、娑婆世界大日本ニ、生身觀世音三拾三鉢まします也。彼御前へ(六オ)西国順礼を一度致たる輩ハ、たとひ十惡五逆のつみ、又むりやうおくがふの間に作りなすものニても、地獄におちず。速に極樂浄土へ、觀世音みずから蓮花をさ、げ、衆生をむかひに来て、ゐんじやうをし給ふ也(六ウ)。其時に、むりやうの諸佛諸ぼさつ百重千重に居らびて、おんがくあり。かくのごとく、相違等有之においてハ、焰魔大王ともに獄そつへ落べきなり。并ニ、毎月觀世音へ参詣致事、かつ又、西国札所之箇所書(七オ)等をくわしく書記、差出し可申者也。

右之通を大王御認めなされ候て、上人へ御渡し被成候へければ、上人方な、めにおほし召、急ぎて我朝へ御持帰られ、熊野権現様此よし御そうもん被成ければ、其砌ハ、此西国順礼と申事(七ウ)弘めんとおほし召被成候へ共、未だとききたらずとて、摂津国紫雲山中山寺の太子御影堂に納置

たまふなり。扱、其後、帝と申奉るハ、花山院にておわします。御年ハ當御十七才にて、御位被成たまふに、一天四海万民を「(八才) 御はかううべき御身ニハ候得共、たゞ御とんせの御望なり。御十九才の御時、西国順礼の事をおぼし召れて、扱、御師匠にはいかなる御僧を頼むべきや」と仰ありけれハ、数多の公卿・大臣方打寄て、いろく」と「(八ウ) 御そうもんなされけれども、「此義ほんりやうニては定めがたし。然れども、君には、兼て紀州熊野権現を御信こうの御事ニ候へバ、早、熊野へ御勅使を御立させられて、御祈念あらバ、かならずく御つげのある」(九才) べくや」とそうもん有けれバ、実もとおぼし召て、早々熊野へ勅使を下し給ふて、一七日の間、終日の夜に、ふしぎ成かな御むそうを蒙りけるところに、「花山院の御師匠と申ハ、佛眼上人と申尊き僧ニ、貴殿帰京」(九ウ)之道筋にて行合申ゆへ、其僧同道申、同うら二つれ帰り給ふべし」と御告有けるに、あんの如く道中筋にて、修行僧に行逢ふたまふ事ゆへ、此僧にむかひ

「御たづね申度義有之。自然、佛眼上人と申」(十才) 御僧ハ御存知なきや」とたづね候へば、修行僧こたへて曰、「佛眼上人と申ハ我事なり」と仰けれハ、勅使もふしき思召けれ共、早速御供申て、都へぞ御のほりありけれバ、去程に、内裏に御着被成候て、勅使の趣申上ける処に「(十ウ)、佛眼上人と申奉る御僧ハ、君の御師匠とある故、御供申帰り候」とそうもん有ければ、法王もな、めにぞおぼし召て、「紫宸殿へ御入れ申」とのせんじ也。扱、此時、法王も上人の前ニ出させ給ひて、御師匠と御頼有て、時刻うつさず」(十一才)、法王御くしを落し、御法名を入かくと申奉るなり。其時、彼御布施として、「七珍万宝を参らせん」とりんげんありけれバ、佛眼上人の御申には、「左様な御請には一切望にあらず。只愚僧ハ望と申ハ、悪業深き衆生を道びく」(十一ウ) 事を望ニ候へ」と御申有ければ、法王も「位には生れ、一天四海をはからふべき身に生れたれ共、罪ふかきものなどをたすくべきほうべんを不存」よしりんげん有けれバ、上人重

て御申被成候二ハ、「衆生佛果にいたる」(十二オ)道もいろく有也。先々、やすやすと佛果をゑんとおもわバ、日本ニ生身の觀世音の靈佛と申、三拾三軀おわしますゆへ、此まへ参り申事を順礼と申なり。則此順礼を一度致したるものハ、地獄へおつべからず。速に」(十二ウ)、極楽浄土へ往生する事うたがひなし。依之、ゑんま十王より、名石のふだ、并二起證文、又ハ參詣日、順礼箇所書等、我朝ニ渡し置れ候へ共、いまだ時きたらざる二よつて、弘まらず。去ながら、是に過たる事あるべからず」(十三オ)、上人申之あり。「幸ひ君の御遁世の被成候事なれば、あわれ此順礼を思召、左候得ば、一切衆生難有存て、皆々君になびき候わん」と御申有。「然るに、順礼の日記と申を召寄られ、御覽候へば」と御申有ければ、法王」(十三ウ)、「夫ハ何国ニ御座候哉」と御尋ければ、此とき佛眼上人の給ふやうには、「撰津国紫雲山中山寺、太子の御影堂ニ納め有なり」。夫へ勅使を御立せ給ふて、勅使太子殿縁側ニありければ、何国ともなく

佛眼上人」(十四オ)こつぜんと御出あつて、兩眼よりハ光りをはなちて、誠尊事ハかぎりなき事なり。此時に、中山の開山涼忠上人、并二能はん法印、弁空法印と右三人にて、太子殿をぞ御開有て、彼順禮日記、并二起證文を」(十四ウ)取出して、勅使に御渡し有之。其時、仏眼上人と御同道二て御下向ありて、内裏へ御参内ありて、法王にも誠に不審におぼし召て、彼石札を押いたゞき、かんるいを催し、難有此順禮の日記、箇所書等を御覽」(十五オ)有。其文に曰、

一、紀伊之國 三ヶ所
一、和泉之國 壹ヶ所
一、大和之國 四ヶ所
一、河内之國 壹ヶ所
一、山城之國 八ヶ所
一、丹波之國 壹ヶ所
一、播磨之國 三ヶ所
一、丹後之國 貳ヶ所

「(十五ウ)

- 一、近江之國 六ヶ所
- 一、美濃之國 壹ヶ所

しめて三拾三所在之候」(十六オ)。

右之通御遠覧有て、兎角にはふしおがむと斗にて、われらか心も浅かるべしとて、「札所壹ヶ所二、七日づ、相籠候て廻り度」よし御申ければ、かくおぼしめし被成候上ハ、逆もの事に上人も御先達を致すべし。我も其」(十六ウ) 心ざしにて候間、「御供申さん」と御申ありければ、法王も誠二難有おほし召て、然は其時上人の御申には、「此たび西国順札之御同行と申ハ、めいど、我朝にて都合十三人御座候」。

然ルに左之通り。

「(十七オ)

- 一、花山院法王 此時代之帝なり。
- 一、圓融院法王 同帝の祖父様也。
- 一、信州善光寺如来
- 一、北辰妙見大士
- 一、焰魔大王
- 一、俱生神

「(十七ウ)

- 一、藏王大権現
- 一、能判法印 津ノ国中山寺の法印なり。
- 一、徳道上人 大和国初瀬寺の開山なり。
- 一、性空上人 播磨国書写山開山なり。
- 一、顕密上人 此御方ハめいど二御出あり。
- 一、威光上人 右同断
- 一、佛眼上人 熊野三所大権現なり。又、壹番那智山なり。

しめて御同行都合十三人。

「右之通の御同行にて、西国順札を致候なり」と、上人是を御申ありければ、花山法王いよく難有思し召て有けるに、其上人御申には、此度西国」(十八ウ) 順札の納札ハ、仏眼上人みづから御書記被遊候て、寛和元癸酉年三月十五日都を御立有て、西国順札に御出立被遊候が、紀伊之國那智山ニと御着あつて、札打はじめ、一ヶ所二一七日づ、御籠有て、月日を重て」(十九オ)、翌年戌六月朔日、美濃国谷汲山にてれうち納め、夫より皆々都へ御下向あつて、内裏に御入有て、其後、

仏眼上人御暇をこひたまへば、法王押て御とめあつて、「扱、此度順礼をいたし候廣徳と申ハ」(十九ウ)、いくばくの事にて御座候や」と御たづねあれバ、仏眼上人の御申には、「廣徳之義は、誠ニ廣大むへん成事にて御座候。且、順礼をば一度いたし候ものハ、十しやうの徳あり」とて、
一ツには、六くわんおんのほん字すわるなり」(二十オ)。
二ツには、右左の足にこんでいのりんほうすわるなり。
三ツには、七なん即滅、七福そくじやふするなり。
四ツには、愚痴の罪ハきへて、心かしこく知恵さいかくを蒙りて、福貴を得る也」(二十ウ)。
五ツには、現世安おん、無病長命、子孫繁昌するなり。
六ツには、三惡道ニ迷わず、惡事災難をのがるゝなり。
七ツには、一生のあいだ、千僧に供養致すよりもまさるなり」(二十一オ)。

ハツには、仏神のかし集て、何事ニても諸願成就するなり。
九ツには、決成往生するなり。
十には、らくせんの觀世音と同座する事、うたがひなし。
右之通りの次第ゆへ、先一度ハ順礼」(二十一ウ)いたしたるものハ、家内へ、忝なくも天照太神宮并ニ熊野大権現、かつ又、ふだらく淨土の觀世音、毎日く影向したまふ御誓ひなり。其外ニ、富士権現の御たくせんにハ、順礼の廣徳と申ハ、美濃国谷汲山」(二十二オ)にて札うち納候て、夫より、たにぐみ山より一夜のこりにて、ふじさんじやう致すべしとの御誓なり。なを又、一家一門之内、一人なりとも西国順礼いたす事なれば、現在の親ハいふにおよバす、七世の父母迄も」(二十二ウ)成佛いたすなり。また、觀音より佛の位に至るなり。且は、父の恩と申ハ、須弥山よりも猶高しといふなり。又、母の恩と申ハ、惣海よりもなを深しと申なり。此故にて、高さも四十里四方の岩を」(二十三

オ、天人の羽衣の袖にて、三年に一度ハなせてな
てつくす事有なれども、父母の恩ハほうじがたしと
申なり。然れども、西国順礼の人ニ、道にまよひた
るか、或は野山にて道を失ひ困りたるものにてても、
ねん」(二十三ウ)ごろに教しへ遣すべし。此功德
にても、我罪めつして、十しゆうの徳二あづかるべ
しと申なり。去ながら、西国順禮を一度致たるもの、
必父母の恩をほうづると申なり。熊野権現の御誓願
ニも、「我前に」(二十四オ)三拾三度あゆみをは
こばんより、一度順礼いたし候ものには、我前のき
だはしを三ッおりたれば、参礼を致すべし」との
御誓願なり。右之趣、佛眼上人こまゝ御語有けれ
バ、猶さら、花山法王もいよく名残を」(二十四
ウ)たまひて、法王御申にハ、「上人ハ何国へ御帰
り被遊候や」と御たづね有けれバ、上人御申にハ、
「我ハ何国とも定めなき修行僧の事ニ候へハ、先是
より熊野へ参詣の心ざしに御座候」と御申有けれ
ハ、法王も猶さら」(二十五オ)ありがたく思し召
て、伏拝むばかり。其内に、上人ハかきけすやう

に、何国へか失給ふなり。然しハ、法王ハかなしみ
給ふとゆへども、聊も風のたよりもおわしまさずゆ
へ、とやせんかくやと御あんじ暮せし内に」(二十五
ウ)、ふつとおぼしめして、「彼上人ハ熊野権現の
御夢そうにて、我が師匠と御頼申上奉りて、出家を
ばとげつるや。さ候得は、熊野へ参籠致して、夢に
成ともある奉度」思召二て、都をしのび出させた
まふて、ほとなくも」(二十六オ)熊野へ御着あつ
て、神殿にむかいて真心の誠を思し召れて、「此度
の御利生と申ハ、廣大もなき。有難事ハ、いくば
くもたとへかたき事なり。何卒、今願くハ御利生
にて、我が師匠と御頼申せバ、仏眼上人」(二十六
ウ)に今一度御引合被下度」とねんじ給ふ。「もし
又、此願も相不叶候ときにおいてハ、再度都へ帰り
不申。何とぞ速に我一命を被召候へ」と法王御手
を合、かんるいをくだき、御祈念有て、一七日之
間御籠被成候に」(二十七オ)、ふしぎやな、満願
の夜半之比に、御神前の御戸を開かせ給ひて、誠
に位高き御聲にて、「然らば、君の御師匠と申奉る

ぶつがんにやうにん、わがことなり。尚又、熊野山清淨殿の
佛眼上人と申僧ハ、我事也。且(二十七ウ)、君の御志あ
権現と申も、我事也。之(二十八ウ)、君の御志あ
まり深きによつて、則、我上人とあらわれて、和光
之ちにまじりたるなり。我も是迄なり。君にも、
早々御帰京の被成かし」と、あらたかに御告有けれ
ば、法王、夢ともまほるともさらに覺(二十八オ)
たまわず。誠にかんるいきもにめあじて、唯、歡喜
のなみだにせき給ひて、「則、我が御師匠と申奉
ハ、熊野権現にましますなり。誠に有がたき事ハ限
りなく、最早、浮世におもふ事もなかりけり」と
(二十八ウ)、御申ありて、法王も其儘にて、那智山
に千日が間御籠有て、其後に、西国三拾三度御廻り
被遊度、思し召被成候へ共、最早、御年も重りまし
まさバ、君の御心には、一ト先都へ御帰りあつて、
京都の東南(二十九オ)に當る、山手の地面を撰
み有て、此(二十九ウ)に紀州熊野三所大権現を移し、く
わんじやう致し度事を思し召、夫より、紀州熊野
より土砂を取寄、京に熊野山をうつして、諸堂を
立て、是を今熊野と申(二十九ウ)奉るなり。則、

西国札所にて十五番なり。

前文、花山院法王ハ、熊野権現の御再たんと申
なり。扱又、佛眼上人ハ、則、熊野権現なり。此度
の順礼には、めいど、我朝との神仏をはじめ、西国
を廻り被遊候事、誠ニ有がたき(三十オ)候事
ハ限りなき次第なり。

右之通之次第ゆへ、此縁記を聞くものハ、
西国順禮を一度致したるにもあたるなり。又其上
に、罪科めつして、佛果の縁もと至る也。惣じて、
此縁記にはつくしがたく、あらましを(三十ウ)
書尽すなり。

御利生有ならハ、則、熊野権現が上人と現じて、
此土のちりにまじハリ、仰おかれし事うたがふもの
ハ、今の世にて災難にあふべし。来世には、むけん
地獄にだざいして、さらく(三十一オ)うかむ
事有べからず。則、熊野権現の御たくせんなり。か
ならずうたがふべからず。

一、南無熊野山清淨殿大菩薩。
三所大権現御宝前の御歌、権現の御詠歌なり」

(三十一ウ)。

じゆんれいをみな人ことにするならば

いづくじごくといふつきのそら

一、其後、此順礼と申事中絶いたせし所、又ハ、人王七十七代の帝にて(三十二オ)、後白川法王浮世のあだなる事を営て、「此度国王に生れたるといへども、生死の道ハ遁るべからず」と思召れて、御位をすべらせ給ひて、伊勢の山路をさして御出ありし所、むかふより僧一人来給ふゆへ(三十二ウ)、法王御覧あつて、「扱御僧、我ハ仏道に深き心さしの御座候ゆへ、われが黒髪をそつてたまへかし」と御申ありければ、御僧の申され候には、「誠に其御心さしニ候得バ、髪をそり参らせん」とて、やがて白川法王の(三十三オ)御髪をそり落し参らせて、「何卒法名を御附下され候や」と御申あつて、御覧なされ候処、御僧ハ見へ給ハすゆへ、又ハ、山中をば御尋入せ給ふに、向より、老人来りしを御覧有て、法王かの老人に尋たまへバ、老人(三十三ウ)答ていわく、「今我髪をそ

り給ふハ。是より紀州那智山に御籠なされ候へバ、かならず御あひ給ふべし」と御申ながら、又、かきけすやうに失給ふなり。是則、天照太神なり。法王はいよく有がたく思召て(三十四オ)、熊野へ急ぎ給ふところ、程なく熊野へ御着あつて、那智山に千日之間も御籠有て、満願のとき、権現顕れたまいて、「法王の御心さしあまり深きによりて、山にまじわりて、御髪をそるなり」とのたまひければ(三十四ウ)、法王難有おほし召、涙を流し、かんるいをながして、法王ハ御歌一首被遊。

桜ばなあだなる露とひとつとや

むじやうの風をたれかのがれん(三十五オ) 権現の御返歌に、

さくら花あたなる露となかむれば

はなハちりてもまたも咲なむ

其時、法王ハ御へん歌を御請ながら(三十五ウ)、「末世の衆生を何として救ふべきや。御告ましませ」と御申有ければ、権現の仰けるには、「衆生助べき道ハ、西國三拾三所順禮を一度すれば、功德の義

ハ廣大むへんなり」と御申有ければ、法王なをさがたにくらひいとみ
ら難有當て」(三十六オ)、夫より衆生のもの共へ、
西国順礼の事を万民に至る迄、此事をき、傳へて、
おい、西國順礼のともがら、数多出るものある
也と申なり。

右之通の事ゆへ、唯うたがわずして、觀世音を
信心すれば、其廣徳の義ハ申不及。去ながら、必
うたがふべ」(三十六ウ)からず。一信心にもいろ
くあり。上氣とあさ氣と深氣と、下根と上根と
真実と、それく我心に應ずるもの故、よく考
てたんすべし。

一、花山院法王の御廟所を書出ス也」(三十七オ)。

前文、花山院法王西國順拜の後、當には、津之
国中山寺と播磨国清水寺との間、道中筋、足遠き
場所にて、物事にふじうなるよしを御さとし被遊
して、此道法十里ばかりある也。然るに、法王思召
に、上田の宿」(三十七ウ)より五十町北へ入込、
尼寺村と申所二山有ける。此山ハ、町のぼり、峯
に花山院法王の一字を建て、御籠被遊候て、其砌

に、附々女官抔在之候へ共、法王と同道申御供致候
て、御山へ登り候事をかたく禁められけるゆへ、せ
ん」(三十八オ)かたなく麓に下られける。夫故、
八町麓の所に、一字の草庵をば建られて、女官達
ハ此所にて、皆々尼となり給ふにより、此所を
にじむ
尼寺村といふなり。扱、法王ハ佛眼と都合十三人、
西国靈場を廻り給ふ。事二つて、じよく惡の」
(三十八ウ)衆生めつざいの功德ハ、是に過ぎるハ
なし。末世はくふくの輩化導の爲に、一度参詣可致
との御告なり。是によつて、中山、清水寺の道筋の
まん中を撰て、摂州三田より五拾町北に、花山法王
みづから、一字」(三十九オ)御建給ふと申なり。
摂津国有馬郡尼寺村、東光山菩提寺。

右之所、今に至る迄、花山法王の御廟所あり。又、
みさ、きもある也。此わけ知る人ハすくなし。但
し、因」(三十九ウ)縁をば知る人ハ、右御廟所へ
参詣不致といふ事、有べからずと申、且、西國順礼
を致す人ハ、別して、参詣のいたさでハ相不成候。
尤、西国の元祖花山院法王成故、猶更、拝参せずん

△有^{ある}べからず。依^{よつて}之^{これ}、知^しらしむる者^{もの}也^{なり}」(四十オ)。
△中山寺より△三田迄五里。
△同より御廟所迄八町。
△同より井沢村迄一里。

三里半あるなり」(四十ウ)。

元治元甲子歳

四月吉祥日寫

中原氏

所持

」(四十一オ)

京衣棚夷川上ル町

井筒屋吉右衛門

所藏

」(四十一ウ)

(注)

(1)

「御にうめて」は「御入滅して」の意か。

(2)

「同うら」は「内裏」の誤りか。

(3)

「入かく」は「入覚」とあるべきか。

『西国三拾三所由来』について

—解説並びに翻刻—

稲垣泰一

Saigoku Sanjusansho Yurai

Taiichi Inagaki

This paper explores the origins of the manuscript entitled *Saigoku Sanjusansho Yurai* (33 temples featuring a statue of Avalokitesvara in western Japan) dating from the year 1864, the first year of the era of Genji in the final years of the Edo period. Along with a simple interpretation of the meaning of this volume, an introduction to the facsimile edition is added.

Saigoku Sanjusansho details in one volume the how and why of the pilgrimage to the Thirty-three Holy Places of Kannon (the Goddess of Mercy) in western Japan. A synopsis thereof is provided in 20 pages where the special features of this work are considered.

This was written and read by a religious association and is thought to have been referred to by those who carried it with them during pilgrimages.